活動再開へ向けて

NPO法人のんび～りすみちゃんの家

東松島市新東名で、宅老所、ディサービス、ディホーム、グループホームと多角的な活動を展開していた「のんび～りすみちゃんの家」。老いても心身に障がいがあったとしても、今まで暮らしてきた自分自身の家庭に近い生活を送ることができる環境づくりを心がけ、活動してきました。

三月十一日、東北地方太平洋沖地震が発生し、仙石線東名駅のすぐ北に位置する三つの施設は東名運河から押し寄せた津波で浸水。スタッフや利用者は避難所へむかいましたが、近隣の四ヶ所の避難所は上手く機能せず、スタッフ同士も思うように連絡をとることが出来ませんでした。

▲泥を被った和室

つながるNPO

運河沿いにあった店舗はなくなり、買い物も隣町まで行かなければ難しい状況です。施設は、津波で一階は泥を被りました。グループホームは、再開の見通しが経っていません。比較的被害の少なかった伊藤壽美子理事長の自宅をディサービスで利用することにし、宅老所は追って修繕することに。泥を被った床板を、他県から集まってくれているボランティアの力で洗い流して、乾かし、再度使用できる形まで再生しました。

「ここで仕事がしたい。グループホームが開けないなら、ディサービスや交流サロンを始めて、地域の人たちが集まれる場所を作りたい」と伊藤さん。六月五日には、NPO法人市民福祉団体全国協議会(市民協)と連携し、小野地区にある中央公民館と、ひびき工業団地仮設住宅の二ヶ所にわかれてサロンを開きました。歌を歌い、お茶やお菓子を食べるブースを設けたほか、美容師ボランティアの方々の協力でカットや毛染めサービスを提供しました。

また、今までのNPO活動を通して出会えた、横のつながりがとても重要な鍵になり、六月十二日には、ミニディサービスを東京のNPOやつながりのある宮城県内のNPOと一緒に開催しました。仮設住宅、避難所から十二名の方が参加したほか、近隣の方や清掃ボランティアも合わせ四二名の参加がありました。

ディサービス再開を目指して建物の修繕に入っていた元伊藤さん宅は、遠方からのボランティアの助けもあって、瓦礫や泥出しなど、施設の中は片付いてきました。多い日で一日二五名程度のボランティアが駆けつけ、泊まりがけでの作業も続きました。一度ボランティアに訪れた方が、横のつながりで広がり、新たなボランティアを連れて訪れています。七月九日には、待望の「復興式」を開催する運びとなりました。

▲サロン開催中

地域交流サロンづくり、そして復興へ

一時は気が落ち込む日が続いたこともありましたが、伊藤さんは、目下、ディサービス再開を目指しているほか、地域の人々が気軽にいつでも集まり話ができる、交流サロンづくりを検討しています。いつ開催すると決めるのではなく、三六五日いつでもお茶を飲み、語りあえる。この地域に住んでいた人達が戻ってくることができる場所を作る予定です。

また、グループホームの建物自体は津波で浸水しましたが、大きなゆがみもなく、今後は地域のニーズや利用者の方々の意見を取りいれながら、活動の場を広げていきます。

「震災から疲れたと思うこともあるけれど、皆に支えられて、応援してもらっているので、大変だけれど頑張らなきゃ」と伊藤さん。震災発生後は、大塚避難所で味噌汁や御浸しを届けたり、地域で必要なものを提供するため奔走しましたが、震災から三ヶ月がすぎ、少しずつ、着実に復興へと向かって動いています。

▲伊藤理事長

連絡先
NPO法人のんび～りすみちゃんの家
〒九八一－〇四一三
東松島市新東名四丁目十一－十四
TEL：〇二二五－八八－二六九一
FAX：〇二二五－八八－二九三八